

直井 潔 — 人と文学

唐 井 清 六

昭和四十六年十月、志賀直哉が八十八歳の高齢で長逝したとき、新聞・雑誌はいっせいに志賀直哉追悼の記事をのせた。そのなかで志賀直哉を、いまだき珍しくたくさんのお弟子を抱えた作家、という取り上げ方をしているのが目に留った。

志賀直哉は、東京の人でありながら（生まれはちがうがそう考えていいだろう）、その作家生活の大半を、我孫子、奈良、京都、熱海など、すすんで景色の美しい地方をえらんでは送ってきた。いわゆる中央文壇を離れたところで、その仕事は孤高に営まれてきたといえる。およそ、弟子をとるといったタイプとは異なるわけだが、指摘されてみると、なるほど、志賀直哉の近くにあつて、絶えずその影響を直接に受けながら、自己の文学を確立していった作家が、すぐに何人か浮かんでくる。へ漱石山脈」という言葉に倣えば、へ志賀山脈」のようなことが考えられるわけだ。龍井孝作、尾崎一雄、網野菊、藤枝静男、島村利正、阿川弘之ら、そして、ここに述べる直井潔氏もそうした作家の中の一人である。

I

直井潔氏は本名を溝井勇三といい、大正四年（一九一五）四月一日、広島県広島市紙屋町に生まれた。父榎松（当時二六歳）、母タ

マノ（同一二四歳）の三男である。父は《安芸中野といふ広島駅から東三つ目の小さな駅で、村の中央を流れている瀬野川を渡って三・四丁片側の山麓に近く》（「従妹」）生まれ、鍛冶屋の内弟子として働いていたが、母と結婚して間もなく、親方から独立し、広島市中で小さな町工場を始める。はじめのうちは兎も角、徒弟数人を使っての順調な生活だったようだが（二十歳過ぎの若氣と生来の短氣も手伝って、二年足らずで失敗し、その後は一向職も定まらず、遂には土地にも居れなくなって、転々と諸々を流浪し、その間乞食同然の生活に落ちて、母は毎日その日暮しのいかけ屋をして歩く父の注文取りをしたり、又或る時は牧場の草刈女に傭われたり、又女土方や、井戸掘手伝いにもなったりして、余りの落ちぶれ方に、数年間は実家へも行方を知らせなかつた》（「母の秘密」）という。母方の祖母は、当時、朝鮮へ移住していて梨や林檎などの農園経営にあつており、内地にはいなかった。母は、広島府中町の生まれで、十七歳のとき、市内の或る裕福な旧家の一人息子のところへ嫁いだ。その男が大へんな放蕩者であつたため一年足らずで別れた。再婚にあつたのは、当然のこととして家柄や財産よりも真面目な人物を望んだらしい。そして、離婚後一年ほどして、榎松と結ばれた。父は、その後、呉や因之島の工場を転々としたのち——その間、

母は、生まれてまがない勇三と四歳年上の兄とをつれて、叔父の家に身を寄せている——、大正五年には神戸の川崎造船所で働くことになり、一家で神戸市長田区大谷町へ転住する。氏が数えて二歳のときのことである。しかし、この勤めも長期の労働争議があったりして長く続かなかつた。たまたま、その頃、近所にある個人病院が新設されていて（父は工場へも行けず、唯ブラ／＼していても仕方がないので、病院の大工仕事の手伝等したりして、その日々を送つて）（父の思い出）いるうち、その病院の賄の仕事を夫婦で始めることになる。この病院の院長は、胃腸薬ピオフィルミンなどをつくりだした天児民恵博士で、博士は、榎松に目をかけ、榎松もまたそれにこたえて病院のためにいろいろと尽力したらしい。その様子は「恩人」という作品に詳しく誌されている。

《院長さんと父は、学校で云えば、校長先生と小使いさん程の違いで、事実世間体の格式では、もっともっと距離があつたと思うが、院長さんは随分父を信用され、毎日本院の方からその病院へ通つて来られて、そんな時大抵、日に一度は、何かの用事を見つけては、父を呼んで話をしない日はないという程で、その点少しも垣を隔てられたような態度は見せられなかつた。そして又実際院長さんは病院を経営されて、案外鍛冶屋上りの私の父が役に立ち、重宝がられて、或は院長さんとしては、父を人間としての掘り出しものように思っていたのかもしれない。》

榎松は、思わぬところで己れの働き場所を見出すことになる。ところが、この父は、氏が東須磨小学校をおえて滝川中学校にすすんだ昭和二年の暮、三十八歳の若さで病死する。その上、朝鮮にいた祖母が、それとほとんど日移さずして亡くなる。母は、同時に、

夫と実母を失うのだ。これは如何にも悲惨である。

父の葬儀のとき、実に多くの会葬者があつたこと、それらの人々に、（院長さん）がいちいち家の者に代つて丁寧挨拶されたことなど、さきに引いた「恩人」の中で、作者は父の像を愛情ふかく書きとめている。

この時、氏は数えの十三歳。四歳年上の兄のほか、五歳年下の妹と十一歳年下の弟とがあつた。母はこれからさき、これら四人の子供をかかえ、女腕一つで賄商売を続け、生活を支えてゆくことになる。

昭和七年、氏は中学を卒業すると、折からの就職難時代で、しばらく西神戸のあるブローカーの店員として働いたのち、神戸湊東区役所に勤務する。兵隊に行く迄の約三年間を、その税務課の一吏員として過ごすのである。この若き日のサラリーマン時代については、豊岡市で出されている京極柁陽主宰の俳誌「木兎」に作者が連載した「吾が思い出のアルバム」の中の「小さな過失」、「自分の仕事」などの小品文で語られている。

氏はこの頃まで、「キング」講談倶楽部」などで、いわゆる大衆小説ばかり読んでいたが、ある時、雑誌「富士」に名作物語として載っていた志賀直哉の「范の犯罪」を読み、非常に心を動かされる。

《それまで私が読んでいたものとはすっかり違った感じを受けました。これこそ本当の小説だ。私はなにか悪夢から初めて覚めたような気持でした。》（志賀先生と私）と後年回想されるが、これがよもや生涯の出合いになるとは、氏には思われなかつたことであろう。

昭和十二年七月、日華事変勃発。一と月程して氏は応召になり、兵庫縣篠山歩兵七十連隊に入隊、半月あまり訓練をうけたのち、広島島の宇品から船で釜山にわたり、朝鮮經由で華北戦線へ派遣される。翌る十三年一月五日の大阪毎日新聞神戸版に「戦線から故郷へ」なる特集記事があり、出田部隊溝井勇三特務兵の「寅年の勇士から幼な友達へ」という一文が掲載されている。けだし、珍品と思われるので、次に収録しておきたい。

《新年おめでたう、今年は寅年だね、虎が藪の中で楽しさうに笛でも出るのを待ってゐることだらう。僕も君と今年の正月こそはポーンを懐にして温泉にでもいってゆっくり温まる考へだったが、今では「此處はお國を何百里」よりも遙かに遠い北支の天地で皇國の一兵として抗日、毎日の支那兵を敵にして戦ってゐる、僕の今日あるを誰か豫想したらう、出征前までは神経痛の病人だったのが今では一人前の兵士だ、重い足を引きずりながら暗い役所の中で蒼白い顔をして算盤などをはちいてゐた自分が輜重兵特務兵として北支の無際限の平原を歩いてゐるとはわれながら不思議に思はれる。ある時ちよつと閑だったので附近を歩いてゐると大きな壕を発見した。中は薄暗い、恐る／＼ぬき足さし足壕に入つて行つた。壕の中は四方にゆけるようになってゐた、その一方にこは／＼ながら足を踏み出したとたんパタと足元に音がした、突差に自分は剣を抜いて思はず身構へてゐた、そこには支那人がひれ伏して助けを求めてゐるのだ、高橋君その時の僕の顔を想像してくれたまへ、さて君は僕が金鷄勲章でも貰ふほどの功名手柄を立てたと思つてゐるか、僕は生

れつき遠慮深いからかりに貰へるものでも返上するのだ。(これは須磨区大谷町一丁目四、高橋祥男兄へ)》

氏は寅年生まれではないが、上官にすすめられてこれを書いたという。

約一年程、各地を転戦。ところが、漢口攻略戦の途中から赤痢に罹り、いったん上海の兵站病院まで後送され治療を受けるが、下痢がとまらず、衰弱がはなはだしく、七月下旬、内地送還され広島第二陸軍病院へ入院する。付添いを要する重症患者で、郷里から母が呼び寄せられた。一ヶ月あまりして大阪府堺の金岡陸軍病院へ転院。「母親」はこのときの体験をもとに書かれたものである。作品では、主人公に回復の兆がみえて、転院するところで終わっているが、氏の実際の病氣はそれほど単純ではなかった。畸形性関節炎という余病を併発して、関節が硬直し、四肢の自由を次第に失つていったからである。

昭和十四年四月、退院して自宅療養にはいる。そしてこれより約三年間は、寝台から一步も動けない状態がつづくのである。体は絶えず痛み、神経も苛立った。しかし、《よもや一生決定的な不具者になる等思つてもゐなかつた》(「松葉杖」)という。

居宅療養が一年、二年と経過するうち、氏は「漸く不具者としての自分の将来の運命に想到するように」(「同」)なる。何度も自殺を考えた。そういう氏を辛うじて抱きとめてくれたのが、志賀直哉の「暗夜行路」であった。

「暗夜行路と僕」のなかで、作者は次のように述べている。

《ある時、僕はその気になって、後篇全部を終り迄丸暗記してしまつたことがある。岩波文庫で三百三十三頁あるのを、毎日一頁づつ

暗記していつて約一年近くかかったが、それが少しも苦痛に感じなかった。(略) 主人公時任謙作は、自分が祖父と母との暗い関係からこの世に生まれたことに悩み続けるのである。僕がいつも感動するのは、謙作が兄からの長い手紙によって、はじめて自分が祖父と母親との間に生まれた、呪われた運命の子であることを知らされる場面で、僕は(略)いつも知らず識らず声をだして読む、その自分の声に思わず泣き出してしまふのだった。その小説の主人公の運命は、そのまま肉声となって僕自身の全身に泌みとおって行く感じだった。そしてこういう僕の経験は、ほかのどんな事からも得られないことだった。大体僕は、子供の頃泣き虫だったが、それがいつの頃からかすっかり涙を忘れたような人間になってしまった。それが不思議と、この小説のこのところを読むときだけ、いつも一人泣けてくるのだった。それはどう云ったらいいか、当時、絶望的だった自分の気持が、この小説の主人公時任謙作の気持とびったり同心同体になったような感じで、われとわが涙にいつか自分の心が洗われ、癒されてゆくような気持だった。』

まことにパセティックな文章である。もしも、「暗夜行路」受容史というようなものが考えられるとしたら、これは逸することの出来ない挿話であろう。

明けて昭和十六年の春、氏ははじめての温泉療治のために鳥取の三朝温泉傷痍軍人療養所に入所する。母がながの看護疲れで腎臓をわるくし、またひどい高血圧であることが分り、いったん母の手から離れることを決意したのだ。ここでの温泉療養が意外に効果があった。関節の痛みは薄れ、氏は目にみえて元気になった。そして松葉杖でならどうにか歩ける程にまで回復した。だが同時に、その限

界も思い知らされた。関節はいぜん硬直したままで、どうしても曲るようにはならなかったからである。体はほとんど棒状で、立っているか寝ているかで、坐ることも腰かけることも出来なかった。

氏は、己れの前途を思いやって、文筆の仕事の本気で考えるようになる。もともと好きな道であるし、幸いそれが可能なように右手と首から上だけの機能は常人なみに残されていた。

昭和十七年六月、和歌山の白浜温泉傷痍軍人療養所に入所していた氏は、そこから志賀直哉にあてて手紙を書く。何か書けたばあい、出来ることなら志賀直哉に見て貰いたいと思ったのだ。もとより一面識もない。住所も、東京の岩波書店に電話で尋ねたという。このときの氏の張りつめた気持のあらわれた手紙も、それに対する直哉の返事も、このたびの『志賀直哉全集』(昭和四八・四九年)で翻刻された。後年、直哉は「私は知らぬ人の原稿は読まぬ事にしてゐるが、直井君の手紙が感じがよかったし、戦争中で、傷病兵の希望を無下に断わる気がしなかったから読む事を承知した。然し期待はしなかった。」(「淵」序)と述べている。

氏は、八、九月の二ヶ月をかけ「清流」を書きあげ、直哉のもとに送った。苦しい執筆だったという。前年、三朝の療養所に入所したときの体験を綴った、百枚ほどの作品だった。直哉は十二月七日附の葉書で、「自分の事に取りまぎれ原稿お受取りした事も手紙の返事も差出さず失礼しました、原稿は未だ見てゐません、此十四日まで少し忙しい事あり、それ以后一つ仕事ありなどして、もう少し落ちついてから必ず拝見します。」と書き、翌年一月十七日附の手紙で、「清流拝見しました、気持よく読みました、主人公が谷看護婦に対する気持の変化少し不明ですが大体書きはじめの人としてはよ

く書いてあると思ひました、あの原稿は人に見せる都合でもう少し御返送遅れます、」と書き送っている。

「清流」は、直哉から「改造」記者の佐藤績にわたされ、この年（昭和十八年）の四月号の同誌に掲載される運びとなる。処女作である。このとき、はじめて直井潔のペンネームをつかう。これは、ジャーナリズム攻勢に出合ったばあいを予想して、それから庇護するため、直哉が氏に奨めてとらせた方法であった。

この頃、氏は母と共に兄弟夫婦の世話になっていたが（病院の賄はずでにやめていた）、《戦争で内地の生活が目に見えて逼迫し、幼児迄抱えた兄一人の月給だけでは、そのやりくりも大変》で《朝鮮に移住していた祖父から渡鮮してくるようにとの便りを渡りの船に》（「霜の朝」）、母との移住を決意して準備中、母は脳溢血のため急死する。五十二歳であった。このときの経緯を誌した「霜の朝」によれば、氏の第二作「母親」がまえと同じく「改造」十二月号に発表になる、その広告記事が新聞にでた日の朝のことになっている。

氏にとって、文字通り身心の杖であった母の死は、如何ばかりの打撃であつたらう。志賀直哉は十二月六日附で、次のような懇篤なる手紙を書き送っている。「拝呈御母上の御逝去謹んで御悔み申し上げます、嘸ぞ驚き、途方にくれられた事と深く御同情致します、普通の身体でないからこれは一層堪えられぬ事と御察します（略）君のからだの事を考へると暗くなりますが、いい細君が早く出来るといいとそれを望んでゐます、不幸が思はぬ所に待伏してゐるやうにさういふ事も思はぬ所から現はれて来ないとはかぎらぬやう思ひます、何時の事か分りませんがそんな気がしてゐます、それを切望してゐます、君の今度のもの読んだ人は皆好意を持つてゐます、素

質のないものあるといふ事は技巧的なよき以上のものです、結局仕事で参つた気持克服するより仕方がないと思ひます、云ふは易く、実際は大変な事と思ひますが、結局それより仕方がないと思ひます、マールリンクの『智慧と運命』はかういふ時読むといふ本だと思ひ、今子供に探さしましたが見つからぬ由で残念です、尚よく探し若しあつたらお送りします」

わたしたちが読んでも深く心を動かされる手紙で、志賀直哉はその後も氏にあて絶えず励ましの言葉を送り、その書簡は四十余通をかぞえるに至る。それらは、先述したようにこの度の『志賀直哉全集』ですべて翻刻されている。（以上次号）